

ウィーンのインド学

原 實

本稿の筆者は1987—88年の夏学期に Wien 大学の Institut für Indologie (インド学研究室)の招請により渡欧し、同研究室に在籍する機会を得た。Innsbruck, Graz, Linz, Salzburg と並んで Austria の学術研究の重要な一環をなす Wien 大学は往年の Habsburg 家の文化振興の余勢をかって今もなお優秀な学者を擁し、その盛況を誇っている。そのインド学研究室には曾って G.Bühler があり、又、近くは E.Frauwallner が講筵を張って、内外の俊秀がその門下集っていたことは人の知るところである。Frauwallner 退官後は G.Oberhammer と E.Steinkellner がそれぞれインド学とチベット学を主宰し、共に欧州に於ける斯学の指導的立場に在る。今回筆者はこの地に住して親しく彼地の研究者、学生に接する機会に恵まれた。ここに Wien のインド学の過去と現在について一稿を草する所以のものは今回の筆者の訪欧に格別の便宜をはかられた Oberhammer 博士を始めとする研究室関係者各位に深甚の謝意と敬意を表せんとするものに他ならない*。

オーストリアに於いて最初に Sanskrit 語が教授されたのは1845年であった。即ちこの年、言語学講座の Privatdozent であった A.Boller(1811—1869)は始めて Wien 大学に於いて Sanskrit を講じ、2年後にはその文法を公けにしている⁽¹⁾。彼はもと医学を志したが、のち言語学に転向し、1855年には大学の印欧語比較文法ならびに Sanskrit 語の正教授に任ぜられ、その関心は延びてウラル・アルタイ言語学にまで及んでいた。1848年王立学士院の客員会員に、又1857年にはその正会員に推挙されている。

Boller を継いで言語学を講じ、この地のインド学に真の礎を築いたのは F.Müller (1834—1898)であった。彼は Wien, 次いで Tübingen に学び、講師、助教授を経て1869年正教授となり、1868年に学士院の客員会員、翌1869年には正会員に選出された。彼は極めて多岐な言語学者で、印欧語のみならずセム語族、北米インディアン言語にも興味を有して総合的視座に立つ言語学を目論み⁽²⁾、又言語と民族との関連を究めようとした⁽³⁾。こ

の多方面にわたる活動と気宇壮大な目論みとは必然的に彼の Sanskrit と
かインド学とかの特殊分野に於ける研究教育の時間を殺ぐこととなった
が、彼はしかし夙に学としてのインド学の必要性を洞見していた。斯くて
彼はインド学に独立の教授職を設立しようと努力し、それは次に述べる G.
Bühler の当地への招致に結実した。Bühler の就任を境として当地のイン
ド学は旧来の印欧語比較言語学の一分科より独立し、空前の盛況をみるに
到った。

G. Bühler (1827—1898) はドイツ Hannover に生れ、Göttingen で西洋
古典学と東洋学を修めた。1858年に博士号をとった後、写本研究のために
Paris と次いで London に赴き、当地で有名な Max Müller の知遇を得た。
1862年 Göttingen に帰り母校の大学図書館に勤務していたが、同年 Max
Müller の紹介で Bombay の Elphinstone College に東洋語学教授職を得、
翌1863年インドに赴いた。折から当地の高等裁判所にあった R. West と親
交を得、1864年以降インド法の実態に触れることとなった⁽⁴⁾が、これは後年
彼の学問の重要な一環となった一連の法典研究⁽⁵⁾に道を拓いた。次いで
1866年には Bombay 州政府より、又1868年にはインド政府より委託を受け
てインドの各地に散在していた古写本の踏査、購入、整理の任に当り、こ
の分野に多大な成果を取めた。彼は又美文調文学、就中歴史小説に興味を
持ち、Daśakumāracarita, Vikramāṅkadevacarita⁽⁶⁾等を校訂出版してい
る。1870年以降彼は Bombay 州北地区の視学官の職を帯び、インドの教育
行政に直接参加することとなったが、その歴史への関心はこの間に彼を碑
文学 (Epigraphik) 古文字学 (Paläographie) 研究に向わしめ、この分野
への関心は生涯続き、又それらと文学の接点は後年の名著 Die indischen
Inschriften und das Alter der indischen Kunstpoesie (Wien 1890) に結晶
した。更に彼は Bombay Sanskrit and Prakrit Series を主宰して西洋古
典学の方法を導入して梵文原典の校訂に範を垂れ、若きインド人学者に掬
るべき道を指示した。しかし長期に亘るインド滞在は彼の健康を蝕ばみ、
ために1880年彼は職を辞してインドを後にした。既述の F. Müller が Wien
大学に Altindische Philologie und Altertumskunde の教授職を開設した
のはまさにこの時期に当り、時を移さず Bühler はこの地に迎えられて
1881年夏学期より開講の運びとなった。

Wien に於いても彼の活動はめざましく、且つ多方面に亘っていた。その
「梵語初等文法」(Leitfaden)⁽⁷⁾は1883年に出版されているが、欧州各地よ
り若者が彼のもとに集って教室は盛況を呈した。又1886年の Orientalis-
ches Institut der Wiener Universität の開設、ならびに1887年の Wiener
Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes (WZKM) の創刊も彼の尽力

によっている。王立学士院は彼を1883年客員に、又1885年に正会員としたが、学士院の出版助成により *Über das Leben des Jaina-Mönches Hemacandra* (1889) 以下数多くの卓れた研究を世に贈った⁽⁸⁾。更に有名な *Grundriss der indo-arischen Philologie und Altertumskunde* の壮大な企画を主宰して、国際協力のもとに前世紀インド学の集成を試みた。そしてここに文字通り *Wien* は世界のインド学の中枢的地位を占めるに到ったのである。然るに1898年4月8日、梵文学、碑文学、法典研究に不朽の業績を残した碩学は *Boden* 湖に船を浮べたまま、不帰の客となった。

この偉大なる *G. Bühler* の後を襲ったのはリヴォニア生れの *L. von Schroeder* (1851—1920) であった。彼は *Dorpat* に生れ、当地の大学で比較言語学を修めた後ドイツに留学し(1874)、*Leipzig*, *Jena* を経て *Tübingen* にり、この地で *R. Roth* に師事した。*Roth* は彼の所持していた *Maitrāyaṇī-Saṃhitā* 写本校訂の仕事を彼に与え、その成果は1881—86年の間に公刊された。この間彼は *Dorpat* に帰り *Homer* の名詞合成語アクセントの研究⁽⁹⁾により博士号を得(1877)、爾後母校の教壇に立ってインド学を講じていた。その講義録は一書となって公刊されている(1877)⁽¹⁰⁾。彼は更に *Berlin* に将来されていた *Kāṭhaka-Saṃhitā* 写本の研究を手掛け、その間にその断片調査のため *Wien* に来訪し、ここで *G. Bühler* と民俗学者 *Ferdinand Freiherrn von Andreas* に知遇を得た。19世紀の終りに近くロシアのリヴォニア圧迫の気運が漸く濃厚となるに及び、彼は故国を去ることを決意し(1893)、折から *Bühler* と *von Andreas* の尽力によって開設された *Innsbruck* のインド学助教授職に迎えられ、1897年には同地の教授に昇進したが、*Bühler* の急死によって更に *Wien* 大学教授に任ぜられた。オーストリア学士院は1899年彼を客員会員、1900年には正会員に選出している。その *Kāṭhaka-Saṃhitā* は1900—10年の間に公刊され、黒 *Yajurveda* の二つの重要な原典校訂は彼の不朽の業績となった⁽¹¹⁾。この他彼は神話学、民俗学に関心を有し、それらはギリシャとインドの神話比較研究⁽¹²⁾やエストニアと印欧民族の結婚習俗の研究⁽¹³⁾に結晶しているが、*Wien* に来た後も *Rigveda* の宗教について二著を公けにしている⁽¹⁴⁾。但し、時に彼の文人的才覚が禍してその *Veda* 研究は *H. Oldenberg* 等の厳正文献学者の論評の的となった。時勢の赴くところ、曾って *Bühler* が学士院を動かして開始した壮大な企画も中断を余儀なくされ、*Wien* 赴任前に彼の占めていた *Innsbruck* の教授職も格下げされてわづかに *W. Cartellieri* (1860—1908)⁽¹⁵⁾が支えていたが、その死後にそれも又廃される運命となった。唯、彼はインド・イラン文献学 (*Iranische und indische Philologie*) 助教授職の設立に意を用い、後述の *B. Geiger* がここに迎えられることとなる

(1919) が、1920年に von Schroeder 自身が歿すると彼の職もまた補充されぬままに留った。

B. Geiger (1881—?) は Wien 大学に学び、アラビア研究によって博士号を得たが、後に Prag, Bonn, Göttingen に留学し、F. Kielhorn の下でインド土着文学、又 F. K. Andreas の下でイラン学を修めた。前者はその Mahābhāṣya zu P. VI. 4. 22 und 132 (Wien 1908) ⁽¹⁶⁾ に結晶し、それによって彼は大学に Privatdozent の地位を得、後者は Die Amṛṣa Spāntas, ihr Wesen und ihre ursprüngliche Bedeutung (Wien 1916) ⁽¹⁷⁾ となって、彼はこれによって既述の助教授職を得た(1919)。しかし、第二次大戦勃発以前の1938年、彼がアメリカに移住するに及んで Wien のインド学は消滅することとなる。斯くて1880年 G. Bühler のために開設された由緒あるこの地の Altindische Philologie und Altertumskunde の教授職は von Schroeder の歿後補充されることもなく、又後者の創設した Iranische und indische Philologie の助教授職も B. Geiger の亡命によって消滅してしまった。約15年の後にこれを蘇生させ、再度 Wien にインド学の黄金時代を築いたのは E. Frauwallner その人であった。

E. Frauwallner (1898—1974) は Wien に生まれ、Wien 大学で西洋古典学、インド・イラン学を修めた。既に1920年代一連の Mokṣadharma 研究によって学界の注目を集め、1928年には Wien 大学の Privatdozent の資格を得た。しかし第二次世界大戦は彼に禍して暫時不遇の歳月を過すことを強いられたが、1955年 Wien 大学に Institut für Indologie が創設せられるや彼は迎えられて教授職を得、1957年には当研究室機関誌として Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd-und Ostasiens und Archiv für indische Philosophie を創刊してこの地にインド学の確固たる基礎を築いた。これより先、彼は1953年に Geschichte der indischen Philosophie I を公にして思想史研究に斬新な視点を提供し、就中 Sāṃkhya 思想形成研究に Yuktidipikā その他資料を駆使して研究方法を一新した⁽¹⁸⁾。1955年オーストリヤ学士院の正会員となり、その後9年間彼は梵巴藏漢の資料を駆使して原典解明に努め、丹念に断片を集めては思想史再構成に独自の方法論を確立した。その下に欧州各地より俊秀がつどって Wien はさながら世界のインド哲学佛教学研究の聖地たる観を呈した。現在 Wien に在って彼は学統を継ぐ G. Oberhammer と E. Steinkellner は言うに及ばず、Utrecht の G. Chemparathy, Leiden の T. Vetter, Hamburg の L. Schmithausen, 又近年 Wien で急死した G. Bhattacharya はその許に育ち、Göttingen の H. Bechert, 更に本邦の梶山雄一、服部正明氏もその学徳に私淑して暫時その地に留った。

1964年彼は健康上の理由によって教職を去り、Utrecht より G. Oberhammer がその後任として迎えられたが、その研究活動はその後も些かの衰えをみせなかった。Dignāga, Dharmakīrti の認識論、論理学、又一連の Abhidharma 研究がこの間に進められているが、その詳細はもとより筆者の評価し能わぬところで、この点に関しては梶山雄一氏の懇切にして詳細な紹介がある⁽¹⁹⁾。近年その遺稿は E. Steinkellner により出版され⁽²⁰⁾、又これに先立って G. Oberhammer, E. Steinkellner 両氏は彼の論文を一書にまとめて研究者に多大の便宜を提供した⁽²¹⁾。

E. Frauwallner 退官後彼の学統は既述のように G. Oberhammer と E. Steinkellner によって継承された。この中、後者については筆者の専門外でもあり、又紙幅に制限もあるから、ここでは前者についてのみ紹介することとする。

G. Oberhammer はチロル出身で Wien に学んだ後インドに留学し、又暫くはオランダの Utrecht 大学で教鞭を執っていたが、1964年に Wien に迎えられた。彼は Rāmānuja や Nyāya の有神思想、ならびに Yoga や神秘主義思想を中心に、インド哲学に関して数多くの論稿を発表している⁽²²⁾。又、啓示 (Offenbarung) や神の顕現 (Epiphanie) 等の神学的諸問題、ならびにインド思想を特徴づける包攝主義 (Inklusivismus) に関して Symposium を組んでは自から編者となり、意欲的に数々の論文集をまとめている⁽²³⁾。ヒンズー教とキリスト教の比較、解釈学的研究も彼の関心事となっている。

その主宰する研究室には Goa の出身で Yāmuna 研究に従事する R. Mesquita⁽²⁴⁾、インド・イラン言語学の俊秀 Ch. H. Werba が助手として、又 Kṛṣṇa 伝説を専攻する U. Podzeit (= U. Kurzgoldstein)⁽²⁵⁾ が司書として共に授業を担当している。他に Innsbruck で西洋古典学を修め更に Karnataka 大学で Rāmāyaṇa 研究によって第二の学位を受けた A. Wurm⁽²⁶⁾ がインド史を講じ、R. Joshi, S. Stark 両人が Hindi と初等梵語文法を教えている。更に言語学の J. Schindler が Rigveda と古代インド語の歴史文法を講ずる他、毎年外国より学者を招いては客員教授としている。1987—88年に先立っては J. C. Heesterman (Leiden), O. von Hinüber (Freiburg), A. Mette (München, 現 Münster) があり、又その後には G. von Simson (Oslo), H. Falk (Freiburg), S. Lienhard (Stockholm) が予定されていた。この地には又現代屈指の印欧言語学者であり古代インド語の語源辞書の著者として知られる M. Mayrhofer、古銭学者として有名な R. Göbl が健在であるが、他面 Wien は近年二人の卓れた研究者を失った。一は H. Krick⁽²⁷⁾ で、ヴェーダ学、就中祭式研究に卓れた業績を残しながら夭折し、他は西洋的方法論を身につけたインド人学者 G. Bhattacharya⁽²⁸⁾ で一昨

年急死した。彼は1983年の国際学会に來日している。

Oberhammer は学士院を動かして Nyāya の術語辞典の編集を企画し、市内に Forschungsstelle を設け、そこには既述の S. Stark と Nyāyabhūṣaṇa を専攻する E. Pretz がその任に当たっている。同じく彼のもとで Nyāya を専攻した W. Slaje は目下 Graz に在る。

以上、Bühler と Frauwallner に代表される Wien インド学の過去と、Oberhammer の活動によって象徴されるその現在を概観したが、これらによって知られるように Wien 大学は欧米のインド学、就中インド哲学研究の中心であり、多くの学者や研究者がこの地を訪れ、又滞在しては研究と教育に従事している。Oberhammer を Herausgeber とする Wiener Zeitschrift für die Kunde des Südasians(WZKS) が Wien 大学インド学研究室の定期刊行物でありながら、Journal Asiatique, Zeitschrift der deutschen morgenländischen Gesellschaft, Journal of the American Oriental Society など、他の一国の主要学会の出版物と同様の学問的評価を得ていることは注目に値するであろう。学問的に極めて高度なオーストリアや学士院の出版物⁽²⁹⁾、又極めてユニークな de Nobili Library の学術出版⁽³⁰⁾をみる時、それらの一切を主宰する Oberhammer の学徳と力量に打たれるのは筆者一人に留らぬであろう。

最後に Frauwallner, Oberhammer, Steinkellner の指導のもとに研究を遂行した学者とその学位論文の題目を列挙して近年の彼地に於ける斯学隆盛の一端を窺うようとする。尚、この List 作製に Ch, H. Werba 氏の助力を得たことを記して、同氏に謝意を表し度いと考ええる。

F. M. Nowotny: *Die Sāṃkhya-Philosophie auf Grund der Yuktidīpikā und der Fragmente der Werke alter Sāṃkhya-Lehrer* 1941.

F. Zangenberg: *Zur Erkenntnislehre der frühen Mīmāṃsā* 1960.

G. Chemparathy: *Aufkommen und Entwicklung der Lehre von einem höchsten Wesen in Nyāya und Vaiśeṣika* 1963.

L. Schmithausen: *Die Entwicklung der indischen Irrtumslehre bis Maṇḍanamīśra* 1963.

E. Steinkellner: *Augenblicklichkeitbeweis und Gottesbeweis bei Śaṅkaraswāmīn* 1963.

G. Bhattacharyya: *Die Lehre von der vyāptiḥ bei Raghunātha Śīromaniḥ* 1965.

R. Mesquita: *Das Problem der Gotteserkenntnis bei Yāmunamuni*, 1971.

O. Grohman: *Die Lehre von avayavī in Nyāya und Vaiśeṣika vor Udayana* 1971.

- H. Krick : *Das Ritual der Feuergründung* (Agnyādheya). Darstellung und Interpretation 1972.
- D'Sa Francis X : *Kumārīlas Theorie der Worterkennung*. śabda-prāmānyam 1973.
- G. Bühnemann : *Der allwissende Buddha. Ein Beweis und seine Probleme. Ratnakīrtis Sarvajñasiddhi übersetzt und kommentiert* 1980.
- Ch. H. Werba : *Das arischen Personennamen und ihre Träger bei den Alexanderhistorikern* (Studien zur iranischen Anthroponomastik) 1982.
- W. Slaje : *Die Wahrnehmungslehre bei Vyomaśiva* 1983.
- M. T. Much : *Dharmakīrtis Vādanyāyaḥ (siddhāntaḥ), Sanskrit-Text, Übersetzung, und Anmerkungen* 1983.
- S. Stark : *Vātsya Varadagurus Tattvanirṇayaḥ Text, Übersetzung, Studie* 1984.
- I. Wicher : *Vākya und Vidhi. Sālikanāthas Vākārthamātrkā* 1987.

* 本稿執筆のために拠った文献は以下の如くである。

- E. Windisch, *Geschichte der Sanskrit-Philologie und indischen Altertumskunde* (Strassburg, 1917-1920)
- E. Frauwallner, *Geschichte und Aufgaben der Wiener Indologie*. Anzeiger der phil.-hist. Klasse der Österreichischen Akademie d. Wiss., Jg. 1961, Nr. 10 (Wien 1961), pp. 77-95 (= *Kleine Schriften*, pp. 19-37)
- G. Oberhammer, "Sanskrit Studies in Austria," *First International Sanskrit Conference*, March 26-31 1972, ed., by V. Raghavan. vol. 1 part 2 (New Delhi 1979), pp. 649-663.

註

- (1) A. Boller, *Ausführliche Sanskrit Gramatik für den öffentlichen und Selbstunterricht* (Wien 1847)
 - (2) F. Müller, *Grundriss der Sprachwissenschaft* (Wien 1876-1887)
 - (3) F. Müller, *Allgemeine Ethnographie* (Wien 1873)
 - (4) R. West and G. Bühler, *A Digest of Hindu Law*. From the Replies of the Shastris in the several Courts of the Bombay Presidency. Part I. Inheritance (Bombay 1867), Part II. Partition (Bombay 1869).
 - (5) G. Bühler, *The Sacred Laws of the Aryas*, Part I (SBE. 2, Oxford 1879) Part II (SBE. 14, Oxford 1882)
- , *The Laws of Manu* (SBE. 25, Oxford 1886)

- (6) —, *The Daśakumāracharita of Daṇḍin*, ed. with critical and explanatory Notes. Part I. (Bombay 1873)
 —, *The Vikramāṅkadevacharita*, a Life of king Vikramāditya-Tribhuvanamalla of Kalyāṇa (Bombay 1875)
- (7) —, *Leitfaden für den Elementarcursus des Sanskrit*. Mit Übungsstücken und zwei Glossaren (Wien 1883)
- (8) —, *Über das Leben des Jaina-Mönches Hemachandra* (Wien 1889)
 —, *Die indischen Inschriften und das Alter der indischen Kunstpoesie* (Wien 1890)
 —, *On the Origin of the Indian Brāhma Alphabet* (Wien 1895)
- (9) L. von Schroeder, *Die Accentgesetze der homerischen Nominalcomposita* (Kuhn's Zeitschrift 24, 1879. pp. 101—128)
- (10) —, *Indiens Literatur und Cultur in historischer Entwicklung*. Ein Cyklus von fünfzig Vorlesungen (Leipzig 1887)
- (11) —, *Maitrāyaṇī Saṃhitā*, herausg. von L. V. Schroeder. 4 Bände (Leipzig 1881—1886)
 —, *Kāṭhakam. Die Saṃhitā der Kāṭha-Cākhā*, herausg. von L. V. Schroeder 3 Bände (Leipzig 1900—1910)
- (12) —, "Apollon-Agni" (*Kuhn's Zeitschrift* 29., 1888, pp. 193—229)
 —, *Griechische Götter und Heroen, eine Untersuchung ihres ursprünglichen Wesens mit Hilfe der vergleichenden Mythologie* (Berlin 1887)
- (13) —, *Die Hochzeitbräuche der Esten und einiger anderer finnischugrischer Völkerschaften in Vergleichung mit denen der indo germanischen Völker* (Berlin 1888)
- (14) —, *Mysterium und Mimus im Rigveda* (Leipzig 1908)
 —, *Arische Religion* I (1914), II (Leipzig 1916)
- (15) Wilhelm Cartellieri は Wien, Leipzig に西洋古典学・比較言語学を学び、1884年に博士号を得た。彼は Bühler の下でインド学を修め、その Indische Paleographie (Strassburg 1896) の Tafel 作者として知られる。碑文研究の他、Subandhu Bāṇa に関して論文を残している。("Subandhu und Bāṇa, "WZKM 1, "Das Mahābhārata bei Subandhu und Bāṇa, "WZKM 13).
- (16) B. Geiger, *Mahābhāṣya zu P. VI, 4, 22 und 132 nebst Kaiyaṭas Kommentar*. (Wien 1908)

- (17) —, *Die Amṛṣa Spṛantas, ihr Wesen und ihre ursprüngliche Bedeutung* (Wien 1916)
- (18) E. Frauwallner, *Geschichte der indischen Philosophie* 2 Bd. (Salzburg 1953-1956).
- (19) 梶山雄一『「仏教哲学」について—E.フラウワルナーの生涯と業績—』『東洋学術研究』18—4, 1979.pp. 51-67.
- (20) E. Frauwallner, *Nachgelassene Werke* I : Aufsätze, Beiträge, Skizzen. Herausg. von E. Steinkellner (Wien 1984)
- (21) E. Frauwallner, *Kleine Schriften*, herausg. von G. Oberhammer und E. Steinkellner (Glanenapp-Stiftung 22, Wiesbaden 1982)
- (22) G. Oberhammer, *Yāmunamunis Interpretation von Brahmasūtram* 2. 2. 42—45 Eine Untersuchung zur Pāñcarātra-Tradition der Rāmānuja-Schule (Wien 1971)
- , *Strukturen yogischer Meditation*. Untersuchungen zur Spiritualität des Yoga (Wien 1977)
- , *Materialien zur Geschichte der Rāmānuja-Schule* I, Parāśarabhaṭṭas Tattvaratnākaraḥ (Wien 1979)
- , *Wahrheit und Transzendenz*. Ein Beitrag zur Spiritualität des Nyāya (Wien 1984)
- (23) —, *Offenbarung, geistige Realität des Menschen*. Arbeitsdokumentation eines Symposiums zum Offenbarungsbegriff in Indien (Wien 1974)
- , *Transzendenzserfahrung, Vollzugshorizont des Heils*. Das Problem in indischer und christlicher Tradition. Arbeitsdokumentation eines Symposiums (Wien 1978)
- , *Epiphanie des Heils*. Zur Heilsgewalt in indischer und christlicher Religion. Arbeitsdokumentation eines Symposiums (Wien 1982)
- , *Inklusivismus*. Eine indische Denkform (Wien 1980)
- (24) Roque Mesquita, *Yāmunācāryas Saṃvitsiddhi*. Kritische Edition, Übersetzung und Anmerkungen (Wien 1988)
- (25) U. Podzeit, *Die indischen Handschriften an der Universitätsbibliothek* (Wien 1988)
- (26) A. Wurm, *Character-portrayals in the Rāmāyaṇa of Vālmiki* (Delhi 1976)
- (27) Hertha Krick (1945—1979) in Memoriam by A. Parpola. WZKS

- 24(1980)pp. 5—13.
- 彙 (28) Gopikamohan Bhattacharya (1. 9. 1930—7. 7. 1986) by E. Steinkellner *WZKS* 31 (1987)pp. 5—8.
- 報 (29) Österreichische Akademie der Wissenschaften, Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen Südasiens 1-21 (1964—88)
- 原 (30) Publications of the de Nobili Research Library 1—14 (1972—87). Occasional Papers 1—3 (1980—87).